



# 太平洋の現場から

## キリバスに押し寄せる大波

キリバスという国

筆者は2010年(平成22年)からOFCFのアドバイザーとしてキリバス共和国の首都、タラワ島にある漁業海洋資源省に勤務し、本年で7年目を迎える。

キリバスは太平洋戦争の激戦地の一つで、タラワ・マキンの戦いという日本よりも米国でのほうが知名度は高い。それほど米国人将兵にも多数の戦死者が出た。キリバスはまた、世界最貧国の一つである。草ぶきの民家、人々の身なり、空港や省庁の建物を見てもシャビイさが歴然である。だが、国民に貧しさの自覚は、今なおほとんどない。経済失政や再度の戦禍にあったわけではない。ただ、今までココナッツと海の魚があればハッピーという日々を享受しているうち、いつしか貧困の方がリーフを越えてやってきた。

つい先頃まで、島には貨幣経済がなかった。島には、お金で買えるものもほとんどなかった。それでも、オーストラリアドルが国の隅々に浸透するのには、さほど時間はかからなかった。しかし結局、お金は国民生活を少しもうおさず、海岸にはごみが増え、数多くの生活困窮者を作ってしまっただけのよう気がする。

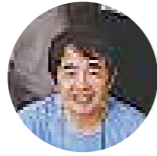
この2年間、キリバス漁業省は日本をはじめとする遠洋漁業国から入漁料を徴収する新しい方法を思いつき、漁業資源をかつての倍の価格で売って、年間1億



ペルー島のソーラーパネル



キリバス共和国  
Republic of Kiribati



公益財団法人 海外漁業協力財団  
キリバス長期派遣漁業開発アドバイザー

高橋 啓三

米ドルを稼ぎ出している。この売上は年間政府歳入の8割に達するが、今のところ政府はこのお金を国民に還元する気はなく、将来の国家資金需要のためにリザーブするという。

### 漁労技術の指導

キリバスには行政上の離島が22島あるが、タラワ島とクリスマス島以外の20島は電化されていない。それでも、各島に携帯電話用アンテナが設置され、電灯より携帯の方が先に普及した。TVは結局一度も普及せず、ソーラーとパソコンがそれに替っている。

より多くの現金収入を得る為に、島の漁民たちの間では日本製の船外機が垂涎的である。キリバスの漁民は、その船外機付き小型漁船で日々の糧を得るために漁に出る。ただ、船外機の故障や燃料切れで、毎年60人以上の漂流者が出ている。2か月3か月と大海原を流され、救助されたというニュースは珍しくなくなった。こうした遭難事故を未然に防ぐため、せめて簡単な船外機の整備方法を学んでもらおうと、OFCFは現地水産局と共同で各島の漁民を対象にした船外機整備訓練を始め、すでに5年が経つ。

キリバス漁民の多くは英語を解せずキリバス語しかしゃべらないので、現地水産局の技術スタッフがキリバス語で教えるようになり、この技術訓練の人気と成果が上がってきた。今では船外機整備のほかに、漁具の作成、魚の燻製製造、航海安全技術の訓練などがセットで行われており、各島から実施要請が引きも切らないほどの活況となっている。

### 暮らしと収入

島では、ココナッツの果肉を干したコプラの生産と沿岸漁業だけが産業と言える。多くの漁民はコプラとの兼業漁業で、月間平均200豪ドル程度の収入がある。漁獲物の半分は晩のおかずを持ち帰り、半分を村で販売し

## キリバスの風景



マングローブ植林活動



北タビテウエアの漁村



船外機整備訓練



アベママ島のダンス



タラワの旧日本軍海岸砲



アバイアン島の村落

ている。現金の用途は米、食油、小麦粉、調味料などの食料品で、残りの多くは子供たちの衣服、交通、教育資金に充てられる。

キリバス人は子沢山で、10人の子供がいるという家は珍しくもない。小さな家の中で、家族は文字通り肌を寄せ合って暮らしている。大人数で仲の良いこうした家族たちを見ていると、日本の少子化対策は基本的に的を射ていない気がする。

キリバス共和国の人口は11万人、世銀による人口増加率は1.541%である。主都のあるタラワ島は各島からの人口流入も多いため増加率はさらに多く、センサスによると2.31%となっている。人口5万6千人のタラワは大人も多いが町中に子供たちがいて、それだけで国の若さと活気を感じさせる。

### ここにもグローバル化の波

キリバスは長らく南洋に孤立して自給自足経済を保ってきたが、近年のグローバル化の波はキリバスも例外とはしなかった。貨幣経済の大波は押し寄せては引き、また襲い、そのたびに大きくなる一方である。携帯やITなど情報化の波は、情報に飢える若者を魅了してやまない。船外機や自動車、電化製品といった技術や膨大な商品の波は、従来の住民のシンプルライフを陳腐化し、貧しくて醜いものに変貌させてしまった。

ただキリバスの民は誇り高い。大波はじっとヤシの木にしがみついて耐え、生き残るすべを民族のDNAに持つ

ていると思う。いずれ波は去り、また再びココナッツと魚とはだしの生活を心行くまで楽しむのかもしれない。常に波をかぶり続けなければならない宿命の日本人たちは、その時どうしているのだろうか。

### エピローグ

フィジー空港に、声と眉をひそめて話をしている中年の白人婦人がいた。その冷やかな視線の先には雑貨の山を抱えビーサンを履いた、場違いな原色ファッションのおばさんたちがいた。褐色の太った彼女たちは疲れ果てていて、わが身を振り返るゆとりもない様子だった。やがて時間が来てゲートでその彼女達とすれ違ったとき「マウリ」(こんには)とちいさく声をかけてみた。その途端ほころぶほほえみとともに明るい声が、「マウリ」、「マウリ」と戻ってきた。またタラワに帰るのだと、ふと心がはずんだ。



漁具作成の訓練風景 (最下段中央が筆者)

写真提供: 高橋啓三